九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

「オノマトペ＋する」の語彙的意味とアスペクト性の研究

伊東, 真美

https://doi.org/10.15017/1522386

出版情報：九州大学, 2015, 博士（芸術工学）, 論文博士
バージョン：
権利関係：全文ファイル公表済

氏　　名	伊東　真美
論　文　名	「オノマトペ＋する」の語彙的意味とアスペクト性の研究
論文調査委員	主　査　　九州大学　　教授　　板橋　義三 副　査　　九州大学　　教授　　岩宮　眞一郎 副　査　　九州大学大学院言語文化研究院　教授　　松村　瑞子

論　文　審　査　の　結　果　の　要　旨

博士論文では修士論文で十分解明できなかった動詞化したオノマトペ動詞(オノマトペ+「する」)の特性全体に視野を置きつつ、動詞の基本的機能であるテンスやアスペクトに焦点を当てた。特にこれまで全く手がつけられていなかった、オノマトペ動詞のアスペクト性に焦点を当て、その意味特性や形態から分析し、これまでの動詞の分類とは異なる、新たな位置づけともに新分類を提示している。

本論文は序章と終章を含めた 8 章からなる。序章ではオノマトペについての概要、研究状況とその問題点を述べ、第 1 章ではオノマトペの音声学的特徴、音象徴、アスペクトに関する先行研究を概観している。第 2 章では本研究の位置づけ、目的、具体的方法を述べる。第 3 章では分析対象とするオノマトペを選定し、対象とした 480 語と「する」の結びつきを書き言葉コーパスにより同定し、オノマトペ動詞になりやすいものとなりにくいものに分類した。オノマトペ動詞化しやすいものは、様態性を表すかどうかによって、大きく 2 つに分類でき、オノマトペ動詞になりやすいものは、「感情・感覚」「動き・状態」「『させる』と結びつくもの」「性質」の 4 つに分類することができた。第 4 章ではオノマトペ動詞化しにくいものを詳しく分析し、オノマトペが動詞化しにくい理由について考察した。

第 5 章からはアスペクトについての論述である。オノマトペ動詞化しやすいものを 10 のカテゴリーに細分化し、オノマトペ動詞の形態論的アスペクトを論述した。第 6 章ではオノマトペ動詞の主文末におけるアスペクト性の表現形式との結びつきを書き言葉コーパスおよびアンケート調査の結果を踏まえて論じた。終章では結論として、まず、オノマトペ動詞についてまとめ、10 に分類した語彙的意味カテゴリーごとに、オノマトペ動詞の語彙的意味と語彙的アスペクト性の関連性を体系的に示した。

博士研究の独創性としてあげることができるのは以下の点である。まず、オノマトペの語彙的意味特徴を特定した、オノマトペ動詞において、その語彙的意味ごとにその主文末におけるアスペクト性とは何かを解明することを目的としている。アスペクトは従来から動詞のみの文法カテゴリーであるため、動詞という品詞内でのみ言語的振る舞いが記述されてきた。従って、オノマトペ動詞に関しては一般に副詞的用法が主であるため、全く論外の扱いしか受けてこなかった。その点を掘り起こしたのが本研究であると言える。つまり、オノマトペ動詞は動詞という枠組みの中に位置付けられてこなかったので、その点からは全く斬新な切り口であり、鋭い着眼点であると評することができる。

研究の手法としては、従来は作例などが非常に多いのに比べ、本研究では『現代日本語書き言葉均衡コーパス』を初めて使用し、機能動詞「する」と結びつきやすいオノマトペを同定した、非常にまれなデータ作成法を行い、多様な動詞の変化形を拾い上げ、つぶさにその動詞を特定できたことも、コーパス言語学の点からも非常に汎用性があり、貢献度が高いと見ることができる。

本論をより詳しく説明すると、480 語という多数のオノマトペを対象とした、データによって明らかになった「する」と結合しやすいオノマトペを、①内的状態性、②シテイル形が結びついたときの特徴、③「させる」との結合という観点から、(1)「感情・感覚表現」(2)「動き・状態」(3)「『させる』と結びつくもの」(4)「性質」という 4 つのカテゴリーに分けている。さらに、それらを語彙的意味素性（直接感覚、継続性、動作性、意志性）の違いや程度によって 10 の語彙的意味カテゴリーに分類している。オノマトペは、動作性と状態性の両方を含んでいるものもあり、その程度に幅があることから、動作性を低・中・高に分け、意志性の有無を基準に加えたことで、オノマトペ動詞の細かな分類を可能にした。

このように、オノマトペ動詞をアスペクト的な観点から独自の基準で分類したことは、従来の意味的分類が中心だったオノマトペ研究から離別し、先駆的なものと言える。

また、オノマトペ動詞の語彙的アスペクト性に関しては、10の語彙的意味カテゴリーごとに、形態論的アスペクトと時間的局面の性質である語彙的アスペクトに区分し論じている。形態論的アスペクトについては、主文末におけるオノマトペ動詞のスル形とシテイル形のテンス、完成か継続か、動きか状態かを記述している。語彙的アスペクトに関しては、時間的局面を表す表現形式が前接する動詞に求める条件を、オノマトペの語彙的意味素性を基盤とした基準で設定し、その整合性を基に結合度を判断するという、新規で理論的な手法を用いて分析している。

さらに、博士論文では、オノマトペ動詞は、(1)スル形で未来の動きを表し、シテイル形で現在の動きの継続を表すというアスペクト対立がある動き動詞、(2)述語部分では常にシテイル形で使用されるアスペクト対立がない状態動詞、(3)その二つの中間的な性質を持つものが、連続的に存在することを明らかにした。オノマトペ動詞は、具体的な動きを表す典型的な動作動詞と状態動詞の間に連続的に位置するものであり、オノマトペの継続性、動作性の程度、意志性、内的状態性といった性質によって、「する」が結びついたときのアスペクト性が異なっていることを体系的に示したことは、日本語動詞のアスペクト研究の新しい知見であると言える。

本研究の成果は、オノマトペの統語的特徴に関する研究を補完するものであり、今後のオノマトペのアスペクト性に関する研究にさらなる示唆を与える独創的研究であると言える。

博士論文の内容と成果から、伊東さんの研究能力は非常に高く、今後の当該分野の研究において貢献するものと確信する。

公開発表会終了後、3 名の審査員が合議の結果、学位請求者の発表、論文、学力は博士の学位授与に十分値するものであると判断し、審査員 3 名全員で合格と判断した。